

① 100万ウォンの小切手を出してお釣りを受けとって出て行った客が再び現れたのは、それからまもなくのことだった。これ計算したのはどこのどいつ？どこのどいつ、という言葉は彼女は表情一つ変えずに言った。それが指し示す対象が自分だという実感がなかった。どうなさいましたか？Rがわたしの前に立った。さっきはお姉さんじゃなかったじゃない？そこ、あの子がしたのよ。彼女はうちのバイトでして、わたしにおっしゃっていただけますか。どうなってるのよ、この店。あんな基本もなっていない子を立たせて。中学校も出てないの？こんな簡単な足し算と引き算もできないなんて。いずれにせよ基本もなっていないバイトには違いなかったのよ、わたしはただ深く頭を垂れていた。申し訳ございません、すぐに計算し直します。Rが何度も頭を下げた。4万ウォン近くもどこで増えたのか、さっぱり分からなかった。差額を受けとった客はわたしを一度にらみつけると、マネキンの首にかけてあったスカーフをはがした。腹が立ってこのままじゃ帰れないわよ。あの子のせいで私がここで潰した時間、これはその補償金の代わりにもらっていくわ。あの子のバイト代から引くか、それはお家で解決して。Rが客の手からスカーフを取り返した。お客さま、これはセール除外品でして。別の謝恩品でお願いします。客が再びスカーフを奪い返しながらか声を荒げた。だれがつまらないおまけなんか受けとると思ってるの？私はこれが気に入ったから持っていくって言うてるの、分かった？

② 小さくて不完全な形の銀色の鍵を机の一番下の引出しにしまったまま、10年が経った。セロハンテープや虫さされの薬のようなものを探す時、何気なくわたしはその引出しを開けたりした。Rからは一度も連絡がなかった。Rとわたしのポケベル番号はすでに地上から消えてしまった。人々はポケベルから携帯電話に、アイ・ラブ・スクールからミニホームページへとしょっちゅう遊び道具を変えた。

この作品を書きはじめから、わたしはSNSの「サイワールド」から“友だちサーチ”機能でRのミニホームページを探してみた。Rと同じ名前の1972年生まれ女性は全部で12人だった。その名前を1つ1つクリックしてみた。12人のRは皆忙しいのか、ミニホームページを更新していなかった。33歳、わたしたちは現実的な時期の真ただ中を通過しているようだった。11番目のホームページをのぞいてみると、メイン画面に女の子の写真が映っていた。3、4歳に見えた。わたしは写真を拡大してしばらくじっと見つめた。目が優しくとても大きかった。よく見ると、顎の丸いラインもRに似ている気がした。もっと写真を見たかったが、写真はそれ1枚だけだった。その子がRの娘であることを、わたしは心より願った。

いろんなことが変わり、また変わらなかった。三豊百貨店の崩壊現場はしばらくのあいだ空洞のままだったが、2004年に複合型超高層マンションが建った。そのマンションが完成する何年か前に、わたしは遠くへ引っ越した。今でも時々その前を通る。胸の奥がぎゅっと締めつけられる時もある。そうでもない時もある。故郷は必ずしも、心底なつかしいだけの場所ではないだろう。そこを離れてから、わたしはようやく書くことができた。

アイ・ラブ・スクール：インターネット上に設けられた同窓生と再会するためのコミュニティ。1999年に生まれ、1年間で500万人の会員を集めるなど大ブームとなった。

サイワールド (CyWORLD)：1999年に生まれた韓国最大のSNS。サイワールド上には「ミニホームページ」と呼ばれる、各個人のミニホームページが設けられている。 <すばる 2014年4月号 きむ ふな訳>